HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	送る言葉
著者	鈴木，英之；SUZUKI，Hideyuki
引用	北海学園大学人文論集(68)：21-22
発行日	2020-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

送る言葉

北海学園大学人文学部日本文化学科　鈴　木　英　之

日本文化学科教授である追塩千尋先生が，2020年3月をもって御退職されます。僭越ながら，ここに送る言葉を申し上げます。

私が追塩先生に初めてお会いしたのは，4年前の採用面接の時でした。実をいいますと，当時，道外出身の私は北海学園大学のことを殆ど知りませんでした。ただ，追塩先生の御論は学部・大学院時代から何度も読んでおり，お名前は良く存じ上げていました。追塩先生の御専門は日本史学ですが，先生の御研究は，私が専門とする日本思想史の分野でも良く知られており，私が北海学園に着任するときには，追塩先生の専門を思想史だと勘違いして，私が先生の後任だと思う研究仲間がいるほどでした。

その追塩先生が面接をしてくださり，私の専門の話を，興味深そうに聞いてくださったことに感激したことを覚えています。私の研究テーマ（中世浄土僧の学問と思想）は，日本思想史の中でもマイナーなものであり，追塩先生が面接の御担当でなければ，北海学園に採用されることもなかったかもしれません。また着任後も，札幌に不案内な私のことをいろいろと気に掛けてくださり，北海道説話文学研究会や北大中世史研究会など，道内の研究者との交流・研鑽の場を紹介してくださいました。

先生は，さっぱりした語り口と気性をもってバリバリと物事を決め，仕事も非常に速く，もうできたのかと慌てることもしばしばありました。手際が悪く，拙い成果しか出せない私に，先生が「良いと思いますよ」とおっしゃってくださいますと，心強く感じる一方で，もっとしっかりやれ，と御不快に思われることもあったのではないかと恐縮しております。

また学生の面倒見もよく，卒業研究の審査を御一緒した際には，学生に向かって，なぜこの研究が必要で，どのように研究史上に位置付けられる

のか，たびたび質問されていたことが印象に残っています。学生にとってはもちろん，研究者にとっても当たり前のことでありながら，このとても難しい問いに，先生は真摯に向き合いつづけてこられました。

先生は，北海道大学助手，北海道教育大学釧路分校の助手・講師・助教授・教授を経て，1999 年に北海学園大学人文学部の教授に着任されました。日本古代・中世仏教史が御専門で，南都仏教の中世的展開を主なテーマとし，その成果は，『中世の南都仏教』（吉川弘文館，1995），『国分寺の中世的展開』（同，1996），『中世南都の僧侶と寺院』（同，2006），『中世南都仏教の展開』（同，2011）といった単著に結実しています。御論は，高度に専門的な対象を扱っているにもかかわらず，問題意識がはっきりしており，緻密でありながら，先生の語り口と同じく論述が明快です。また古代から中世へといった大きな時代の流れを常に意識し，日本仏教界全体の中での南都仏教というように，広い視点から対象を捉える姿勢が強く感じられます。

先生の御研究は史学にとどまらず，文学作品（説話集）にも向けられています。南都仏教の研究といいますと，寺院経営や僧侶たちの繋がりといった史学的な側面からの研究や，戒律を中心とした教学的（思想的）な側面からの研究が多いのですが，先生はそれのみならず，『今昔物語集』『古今著聞集』『古事談』『沙石集』といった説話集にも目を配り，説話集選者の価値観や編纂意図・編集意識などを通じて，中世の宗教世界のあり方を掴みとってこられました。『日本中世の説話と仏教』（和泉書院，1999），『中世説話の宗教世界』（吉川弘文館，2013）などの説話を対象とした御著書は，先生の御研究の幅広さを示すものといえるでしょう。スケールの大きな研究姿勢は，教育にも反映され，説話集や聖徳太子信仰にまつわる演習・講義も行われていました。学生も大いに刺激を受けていたものと思います。

このように研究・教育の両面で多大な貢献をされた追塩先生が御退職され，お目にかかる機会が減ることは寂しく思いますが，研究上で今後も御指導頂きたく存じます。先生の一層のご健勝とご活躍をお祈りし，簡単ではありますが，送る言葉にかえさせて頂きます。